

昔捨てたあやかし従者の執着に囚われ逃げられない話

く異界で軟禁された挙げ句、私を嫁にする為に毎晩孕ませようとしてきます助けてく

◇ 目次 ◇

第一話	ようこそ異界へ．．．．．	3
第二話	再会とまぐわいと．．．．．	38
第三話	術中へと陥る．．．．．	82
第四話	まるで恋人同士のように．．．．．	121
最終話	甘くて苦い結婚式．．．．．	156
後日談	神楽のリベンジゲーム．．．．．	171

第一話 ようこそ異界へ

「ほら、いい加減お腹がすいたでしょう？ 食べてください、はい、あーん」

神楽は私の口元へと木の匙を持ってくる。

私はふるふると首を振り、拒否する。

「だ、だめ。こんなに異界の力が強く込められてるものを食べたなら、現世に戻れなくなっちゃう」

お麴を豆乳とかつお出汁と共に煮込んだ食事は、最近食事を抜いていてお腹が弱っている私にも食べやすいようにと気を遣われたもので。

正直、とてもいい香りで美味しそうだと思ったけど、陰陽師としての私がこれは食べ
てはいけないと囁いていた。

今まで用意された食事も正直、こういう異界の力を強く感じるものが多かったから、
今更ではあるんだけど。

「いいのですか？　今、あなたに用意できる食料はこれだけなのですが」

「僕にはよく分かりませんが、人間には餓死という概念があるのでしょう？」と神楽は
首をかしげた。

神楽は私の足に自身の足を絡める。その仕草に昨日の情事が思い出され、私は頬が熱
くなる。

「この前食べさせられた果実も異界の力で満ちすぎてて、お腹を壊しちゃったんだよ。もっと普通のご飯が食べたい」

敢えて色気のない事を言ってこの空気をぶち壊そうとするも、神楽は私の体を寝台へとまた押し倒した。

こ、この人、昨日も一昨日もしたのに、なんて元気なんだろうか。これも今更か。

「では、僕の精力を取り込んでから食事をしましょうか。そうすれば、少しは異界の力への抗体ができるはずですよ」

「私は、元の世界に戻りたいの！　あなただってそろそろ、私の貧相な体なんか飽きたでしょ!？」

私がそう叫ぶと、神樂はにっこりと微笑みながら言った。

「いいえ、あなたではまだまだ暇が潰せそうだと思いますし、あなたにとってもこの世界の方が元の世界よりずっといいのでは？」

「いや、私は別にこの世界に来たくて来た訳ではないし」

「おや、ではあなたの従者の狛犬を見捨てるのですか？　やはり薄情な人間だ」

「庵のことは絶対に助ける！」

「庵のことは、ですか。はは、やはりあなたは僕の思った通り、ろくでもない人間のようだ」

神楽は私の頭を撫で、あやすように言った。

「あなたは現世ではずっと、底辺陰陽師として生きていたんでしょう？ お金もなく、陰陽師としての才能もなく、未来への希望もなく」

「それは微妙に凶星ですけども」

でも、そんな底辺陰陽師ライフでも、こうして異界の牢屋に閉じ込められる生活を送っているよりは100倍マシなはずだ。

「ああ、ちゃんと認めるんですね、自分がとてつもなく惨めな存在である事は。偉い偉い」

「馬鹿にしてるんですか？」

「でも、僕の側にいれば、こうして衣食住の心配もなく、ただ飼われているだけで一生を終えられますよ？」

「それは俗に言われる地獄では」

こうして異界で偉い立場にいるあやかしである神楽専属の娼婦として、現世からきた陰陽師の私は捕らわれている訳だが、こんな生意気な口をたたくのを容認されていることぐらいしか私に自由はない。

高そうな調度品の置かれた広い、謎に防音性もある座敷牢の中で、私は隣人の囚人に「待遇がよくて羨ましい」などと言われつつも、神楽との性交渉以外にやるべきこともなく生きていた。

早く異界に拐われた庵を見つけ出して、私は現世に戻らないといけなのに……！

「ふふ、ここから出たいなら、あなたが僕の子供を孕んでくれればいい。そうすれば、

あなたを六楼家の当主の妻として迎え入れられますから」

「……どこから突っ込んでいいのか分かんないけど、人間とあやかしの間で子供が生まれる確率は限りなくゼロに近いんだよ」

まあ神楽も本気で言っている訳ではないんだろうけど、と私がため息をつくとき、神楽はすうつと瞳を細めた。

「だから、あなたにたくさんチャンスを与えられるよう、出来得る限り、毎日交わっているではありませんか」

「人間と猫又の混血なら、きっとあなたのような底辺陰陽師でも高い妖力をもった子供を産めるでしょう」と神楽は嘯き、私の額へとキスを落とした。

「どうせ現世に戻っても、誰から必要とされず、誰の役にも立てない弱々しい人間としてあなたは踏みつけられて生きていくのでしょうか？　なら、この異界を統べる六楼家の当主の妻として僕に庇護されて生きていく方がよほど幸せではないですか？」

「いや、私の幸せは私が決めるんで」

「ああ、なんて僕は優しいのでしょうか。こうして自分を捨てたご主人様に対してもこんなにも慈悲を与えているのですから」

「切実に私の話を聞かないのをやめてほしい」

しかし、それ以上私は神楽に強くは言えなかった。

私が昔、私の従者をしてくれていた神楽を捨てたというのは事実ではあり、憎まれて
いるのも仕方ないとは思っていたからだ。

だから、この座敷牢を脱出して従者のあやかしである庵を見つけるまでは、神楽のや
りたいことに付き合うという気持ちはある。

どうせ、猫又と人間の混血の子供なんて生まれることはないのだから。

……この時の私は神楽の私への気持ちの厄介さを非常になめ腐っていたのである。

それを後悔するのは、もう少し先のこと。



そもそも私が元従者なおかつ現異界のお偉いさんこと、神楽に囚われることになったのは、私がどうしても異界に行かなければならない理由ができたことがきっかけだった。

私はそれまでは現世の日本の下町で、平凡な日々をおくっていた。

「真名様、そろそろ依頼のお時間ですよ」

「ごめん、それはなくなっちゃった。私よりも腕のいい陰陽師が見つかったんだって」

「なるほど、それは仕方ないですね。また次の依頼を探しましょう」

のほほんと笑う庵を前に、私はがつくりと項垂れた。

「ごめんなさい、また電気代が払えないかもしれない……そろそろ電気、止められちゃうかも」

「国民年金保険の支払いの免除の手続きはもう出来たんですよ？」

「うん、終わったよ。私が陰陽師として不出来なばかりに、庵にまで迷惑をかけてごめんね」

「俺はこうして匿ってもらってるだけで大感謝なので、あなたにどうこう言える身分ではないですよ」

俺はそういつてニコニコと微笑んでいてくれるが、私の罪悪感が消えなかった。

私一人ならともかく、従者にも迷惑をかけてしまうのは申し訳ない。

私は本当ならあやかしの従者ともう契約するつもりはなかった。

私なんか、そんな甲斐性はないと分かっていたから。本当なら私みたいに弱い呪力しか持っていない陰陽師はあやかしと契約しないと、ろくに怨霊や怪異の類いとは戦えないのだけでも。

でも、俺は「月長石の涙」と呼ばれる特別な力を持つ狛犬のあやかしで、何でもその名の通り涙が月長石、洋名ではムーンストーンという宝石へとなくなってしまいう体質らしい。

それに目をつけられ、異界の中でも悪質な組織に囚われそうになっていたらしい所を私がなんとか助けだし、こうして従者になってもらった。

なお、俺には月長石の涙以外のまじないは使えない為、陰陽師としての依頼の時も基本的に呪力のない人間でも出来るような補佐を頼んでいる。

「すみません、本当は俺が『月長石の涙』の力を使えば、金銭的にあなたを助けられるんですが」

「いやいや、あんな力を無理に使わせようだなんて思えないよ。もちろん、バイトのシフトは増やしてほしいけど」

「俺の主人は鬼だなあ」

「ごめん。私もコンビニのシフトとか増やしたから、許して！」

私が両手をあわせて庵に拝み倒すと、庵はうつすらと笑う。

「もういつそのこと、陰陽師を辞めて、普通の企業で就職するのを目指すのとかどうですか？　俺はあやかしだから、フリーターにしかねないけど、人間のあなたなら正社員を目指せるでしょ」

「ううん。私は、陰陽師でいいといけないから」

私は服の内側に隠した薄桃色の勾玉のネックレスを、ぎゅっと握りしめる。

これは、私の中でのけじめだった。

私の大切な従者だった存在を捨ててまで守ったものを、私は捨てる訳にはいかない。

「それは全部、小倉家を守るために？」

「うん、もちろん」

本当は私の守りたかった小倉家はもうないも同然だれど、それでも大切な従者を犠牲にしてまで守ったものは捨てられない。

「すでに一族郎党、小倉家はあなた以外離散したんですよね？ どうしてそこまでしてそんなものを守りたいのか、分っかんねえな」

「ごめんね。いつか庵を守ってくれるもっと大きな陰陽師の一族を探し出せるまで、私に付き合って」

「あなたは本当に人を頼んねえよな」

そういつて、庵は深い深いため息をついた。

「俺はあなたに幸せになつてほしいと思つてるし、もっと楽な生活をしてほしいんです。あなたの意志とは反してるのかもだけど、そんな馬鹿みたいな信念捨てちまへつて正直思つてますよ」

「ありがとう、私の事を思つてくれて」

庵は私をじつと見つめたあと、静かにうつむく。

「迷つてたけど、やっぱり乗るか。あの話に」

「え？」

「なーんでもありませんよ、さ、明日のご飯の分の雑草をとりに行きましよう」

「うんっ！ 食べれる雑草を見分けるのは、呪術より得意だよ！」

「それはそれで陰陽師としてどうなんすか」

庵はその能力から、性別は男だが、「月長石の姫君」と呼ばれることもあるらしい。

しかし、やはり性格はお世辞にも姫君だなんて言える感じじゃないよなあ、と私はしみじみ思ったのだった。

庵に小言やお節介なことを言われたり、鬼のように貧乏だけど、幸せなことも辛いことも人並みにある暮らし。

こんな平穏で平凡な生活が、ずっと続くと思っていた。



「ちょっと遠出してくるから、2日ぐらい帰らなくても心配しないでくださいね」

そういつて庵がいなくなってから、一週間がたった。

……まだ庵は、家に帰ってきていない。

元々、庵はふらっと2、3日ほどいなくなつては、まとまった量の金銭と共に帰宅するということがあった。

どういう手段でお金を稼いでいるのかは本人が話したがらなかったのと、庵はちゃんと本人の宣言通りの日数でいつも帰ってきていた。

だから、すごく心配な気持ちはあれど、深追いしてどこに行っているのか、何をして
いるのか聞いた事はなかった。

庵も月長石の涙の事情さえなければ、本来なら一人で自分の足で立って生きている立
派な大人のあやかしだ。

私とずっと二人で暮らしているのも息がつまるだろうし、たまには一人になりたいの
かもしれないと深く詮索はしていなかった。

それを今、私は深く後悔している。

「庵、どこにいったの？」

私は首にさげた勾玉を縫るようにぎゅっと握りしめ、家の中を不安な気持ちのまま電気もつけずに歩き回る。

庵が庵の意志で私の元から去ったのならいい。でももし、庵が攫われたりしているのなら。

「……庵、お願い、無事でいて……!」

「旦那様の仰る通りの方ですね、あなたは」

暗い家の中に女性らしき透き通った声が響きわたった。

「だ、誰なの!？」

私は咄嗟に周囲の気配を探ると、あやからしき妖力がこの部屋の真ん中に感じられた。

いつの間にか正体不明のあやかしに家に侵入されてたなんて、本当に私は駄目な陰陽師だ。

咄嗟に護符を腰から抜き取ろうとすると、私の体が金縛りにあったかのように全く動かせなくなる。

「なんて弱い。こんな人間になぜ旦那様もご執心なさるのか」

そんな声が聞こえたかと思うと、パチリと電気がつけられる。

気づけば目の前には白い着物を来た、冷気をまとった美しい女性のあやかしがいた。

彼女の周囲には氷の粒が少しだけ浮いている。

「もしかして、あなたは氷女さん？」

私は手足を動かせないままだったが、どうやら喋れはするように力加減をされているらしい。

そんな真似ができるのは、恐らく高位のあやかしである証拠だろう。

私は警戒心を高めつつも、相手の意図を探ろうとする。

「それに答える義務はありません。私はあなたに手紙を預かってきました、ただそれだけです」

「手紙？」

「ええ。本来ならあんなあやかし、縁もゆかりもありませんが、旦那様からもしび届け
るようにと念を押されましたので」

私は「何だそれは」と首をかしげつつも、とりあえず受け取ってから考えようと思い直
した。

怪しい呪術がかかっている手紙なら、開ける前にさすがの私も察知できるだろうし。

「分かった、見せてほしいな」

「そんなにあっさりあやかしからものを受け取るような態度はよくないのでは。まあ私
にとっては都合がいいですが」

「えーと、心配してくれてありがとうだね」

「素直か？」

氷女さん（暫定）は真顔で突っ込みをいれつつも、無言で私にチラシの裏紙のような素材のメモを差し出した。

これが手紙？ 手紙というよりも書き置きのようなのだ。

金縛りはどうやらとけたようなので、私は氷女さんの差し出した手紙をそっと受け取り、目を通す。

「……………っ!？」

そこに書かれていた文面に、私は固まった。

『すみません、ちょっと色々しくじって異界に攫われました。俺の事は忘れてください』

末尾に『庵より』と書かれたメモに、私は目を見開く。

それは確かに庵の筆跡で書かれたもので、恐らく本当に本人が書いたものに思われた。

異界とはあやかしや怪異が住まう、人間が住むこの現世とは異なる世界だ。

現世と異界の取り決めで、人間は本人が行く事を本気で望まない限りは侵入ができない仕組みになっている。

「私とそのメモを受け取ったのは偶然です。しかし、あなたが異界に来て、私に手紙を渡した方を助ける事を望むのなら、お連れするようにと旦那様からも指示を受けております」

「旦那様？」

「あなたが異界に來れば、お会いする事もあるでしょう」

私は何をどこまで信用していいのかよく分からない事態に、困惑する。

「今の話って、本当の事として受け止めていいの？」

「ご自由に。ただし、今のあなたにはこの庵さんという方を取り戻す手段は、私の手を取る以外にないというのが確かな事実です」

「本当に庵は、異界に攫われたの？」

「この話を信じなくても、私としては構いません。ご自由に」

氷女さんは冷たいというよりは私に対して何も頓着していなさそうな顔で、淡々と話す。

私の頭にはぐるぐると疑念と焦燥が渦巻いた。

こんな話、怪しすぎると一蹴してしまいたい。でも、もし本当だったら庵はどうなるのだろう。

……私には、庵を見捨てることなんてできない。

でも、異界に行くなんて判断も、そう簡単にはできない。

陰陽師が異界に行ったら、異界の力あるあやかしに見つかれば、あつという間に牢屋行きにされるだろうから。

「ああ、そういえばこの方からもう一つ預かりものをしてきました」

「え？」

「生活に困ったらこれを売るように、との事です」

氷女さんが懐から取り出したのはひとときわ大きい月長石で、私は思わず固まった。

ああ。これがあるという事は、氷女さんの話に間違いはないのだろう。

「……庵……っ！」

「庵さんに会いたいですか？」

「会いたいし助けたいに決まってる！」

「私は庵さんが異界のどこにいるのかは把握していませんが、庵さんが攫われた異界に連れていくことは出来ます」

自分がピンチな時まで、私を氣遣ってこんなものまで渡そうとしてくれた庵。

何よりも大事に思っていた従者のあやかしを捨てて、その従者を犠牲にしてまで守ろうとしていた家族も失くし、すべてを失った私の側にいてくれた庵。

私は、何としてでも庵を助けない。

……頭のどこかで、理性が焼ききれる音がした。

「氷女さん、私を異界に連れて行ってほしい」

「そうですか。私個人としてはやめた方がいいと思いますが」

「私も本当なら行くべきじゃないのは分かってる。でも、どうしても庵を助けたいの！」

「あなたは騙されやすい方ですね」

そういった氷女さんの瞳にうつっていたのは、私への微かな同情のような色で。

私が固まってしまおうと、氷女さんは小さくため息をついた。

「え？」

「何でもありません。それと私の名前は雪華です。呼び捨てでもちゃんづけでも、ゆき

ちゃんでもゆつきーでも、お好きに呼ばれてどうぞ」

真顔でさらりとそんな冗談か本気か掴みづらい事を言う氷女さんに、微妙に反応に困るものの、少しだけ今までにない人間味(?)も感じられた。

「じゃあ、普通に雪華さんって呼ぶね」

「ご自由に。では、異界へとお連れします。私は言われた事を言われた通りに行うだけの存在ですから」

雪華さんは無表情に私に向かって手をかざす。

「えっ。着替えとか護符とか食料とか色々準備したいんだけどな!？」

「それは大丈夫です。あなたにそういうものは必要ありません、旦那様が衣食住の全てを用意するでしょうから」

「その旦那様っていったい？」

「たぶん見れば分かるんじゃないですか？」

雪華さんはめんどくさそうな顔で首をかしげつつ、妖力で地面に光の輪をつくる。

これは、間違いなく異界への門だ。

やっぱり早まったかも、もっと悩むべきだったかという怯えのような気持ちは、手の
中のメモの感触で薄らいでいく。

「庵、私は絶対にあなたを助ける！」

「きっと大丈夫ですよ、庵さんは」

雪華さんはどんどん妖力を高めていき、異界への門から溢れんばかりの光が放出されていく。

「では、参りましょうか、異界へ」

「う、うん！」

「私は言われた事をするのみですが……あなたに恨まれても仕方ないと思います」

雪華さんのそんな憐憫の色を感じさせる言葉を最後に、私の視界は真っ白に包まれた。

そして次に目を開いた時に最初に見たものは。

「ふふ、お久しぶりです。僕の元ご主人様こと、真名様。あなたにこうしてまたお会いできる時を一日千秋の思いでお待ちしておりました」

そういつて私を微笑みながら抱き起こす、銀髪で紫色の瞳をもった、妖艶な美しさ
と男性らしい色気のある、美青年だった。

こんな人、見覚えがない。でも、私は気づいてしまった。

この穏やかでありながらも、どこか鋭利な雰囲気もあわせ持つ男性の正体は。

「もしかして、神楽なの？」

「気づいていただけましたか？ ええ、その通り。僕はもうあなたのものではなくなつた、神楽ですよ」

私が捨てた元従者である猫又のあやかしは、そういつて艶然とした微笑みで私の元に再び現れた。

「ありがとう、雪華。あとで臨時の給与を出しておこう」

「お気遣い痛み入ります、旦那様」

そんな雪華さんと神楽の会話に、私の決断はもしかしたら間違えていたのかもしれないという不安が湧いてきていた。

(中略)

すでに服は下着以外全て脱がされ、ほぼ裸のような状態にされてしまっていた。

そのことに羞恥心はあるが、今はむしろこれから行われる行為への緊張感の方が勝っていた。

神楽の手が両胸の横側をゆっくりとさすってくる。

小ぶりの双丘の中腹から裾野までをすりすりと往復され、私はびくびくと体を震わせた。

核心の部分に触れそうで、触れられない。それでもじわじわと溜まっていく刺激に、私は思わず太ももの内側をぎゅっと強く引き締めてしまう。

「ふふ、実に処女らしい反応だ。あなたが人間の男に拐かされていないようで、安心しました」

「……きやつ!？」

神楽は私の太ももに自身の右足を割り込ませ、私の秘部をトントン、と膝で刺激した。

「や、やめて、こんな事されても、私は別に感じたりなんかしな……っ、あっ!」

彼の膝が私の秘芯へとぐりぐり押しつけられ、気づけば私の口からはあられもない声が飛び出していた。

自分でフラグを立てて速攻で回収していくスタイルに我ながら笑ってしまう。

……とか、ふざけて言っている場合ではない。

神楽の膝は的確に私の秘芯を強く擦り、下着がそこに食い込み、更なる刺激を生み出していく。

「……んっ、んんっ……」

実際に触られた訳じゃないのに、擦られれば擦られるほど、どんどん感覚が敏感になっていく。

ふ、普通、こういうのって、手とか口で触られて「あん♡」とかなるものじゃないの？

なんで、私は膝を押しつけられてるだけでこんなに感じちゃってるの!?

「俺の膝はそんなに気持ちいいですか？ ふふ、卑しいあやかしである僕のこんなに雑な愛撫でここまで気持ち良さそうな顔をされるなんて」

「神楽は卑しくなんてないよ！」

私が思わずそう叫ぶと、神楽はピタリと手と足の動きを止めた。

「ここで反論するのがまずそこ、なんですね！」

「……………あつ、んっ」

神楽は私の胸をするりと円を描くように撫で上げ、先ほどまでより大きな力で秘芯の中心に膝を狙ったようにぐりぐりと押し込んだ。

そのまま、私の胸を未だに守ってくれていた下着を剥ぎ取られる。

「や、やめて、見ないで！」

私の小ぶりの胸が神楽の視線に晒される。恥ずかしすぎる。

神楽はふっ、と笑った。

「子供の頃はよくお風呂に一緒に入っていたのに、今は僕に胸を見られるのが恥ずかしいんですか？」

「そうに決まってるじゃん!？」

「俺はあなたが子供の頃からあなたの裸体に興奮していましたけどね」

「そ、そのカミングアウトは切実にいらなかったかな」

神楽は返事をしないまま、私の乳首をきゅつと摘まむ。

「可愛い桜のような色の乳首ですね。小ぶりですが、美しく愛らしい胸だ。素肌が

真っ白で、乳輪も綺麗です」

神楽はそういって、私の乳首をつんつん、と指で突っついた。人の乳首で遊ぶな。

「急におっぱい分析家にならないでください」

「でも、これからこの可愛い胸が俺に弄り倒されて、どんどんくすんだ色に変色し

ていくのですよ。ふふっ、可哀想に」

非常に楽しそうな「可哀想に」に私は少しいらっとしつつ、どうやら神楽は私との夜伽を一度や二度で済ませないつもりであることを察し、背筋が冷たくなった。

「さて。では、本格的にあなたを愛でていきましようか。ちゃんと最後まで僕なんかに屈しないでくださいね？」

神楽は右手を私の秘部へ、左手を左胸へともっていく。

このまま神楽に何をされるのか、本能的に察する。

その時、私の中に生まれたのは、恐怖と拒絶と………ある種の、期待で。

そのことに気づいて、ぞわりと背筋が冷たくなるが、次の瞬間、神楽に与えられた感覚に全てが塗りつぶされた。

下着の上から秘芯をつまみあげ、すりすりとお撫でられ。

左胸は神楽の大きな手ですっぽりと包まれ、全体をマッサージするかのようによまれ、形がゆらゆらと変形していく。

動きとしては優しく緩やかですらあり、激しく攻め立てるようなものではない。

それなのに、先ほどからずっと高められていた熱がそんな刺激をより敏感なものにさせた。

やっとそこに直接手で触れてくれた、でもまだ足りない、もっと強く、もっと感じる場所に触れてほしい。

「……んっ、ふっ、あっ、あっ……」

私の腰は気づけば、もっともっととねだるように小さく揺れていた。

それに気づいて止めようとしたけれど、彼はその動きを目ざとく見つけ、ふっと笑った。

「あーあ、僕に屈すると言ったばかりなのに、自分からねだるような事をして。元従者として、主人がこんなに淫乱だったなんてがっかりですよ」

「ご、ごめんなさい……」

「ふふ、ぜひ、もう一度？」

「ごめんなさい……って、何度も謝らせるな!？」

しかも、正直今のは謝る必要のないことで「ごめんなさい」を言わされた形だったと思う。ついつい乗せられてしまったけども。

「本当は「淫乱な女でごめんなさい。淫らな私は一生神楽に性欲管理されて生きていきます」と言ってもらいたかったのですが」

「そんなの死んでも、言わない！」

「そんなに強気に言っても、こうして少し触れただけで敏感に反応するのでは、説得力がないですよ？」

「……やつ、あつ、っん……」

神楽は私の左胸の乳首を指と指の間でつまみ上げ、右手の指を下着越しの私の秘唇にぐりぐりと押し込んだ。

膣内の浅いところまで神楽の指先が届き、私はそれまでになかった刺激にびくりと体を震わせ、軽く足のつま先が伸びるのを感じた。

「おや。下着にあなたの蜜が滲んでいたようで」

そういう神楽の指先はわずかに濡れていて、彼はペロリとそこを舐めとった。

「ふふ、美味しい。焦らしに焦らすつもりでしたが、あなたはもう十分に感じているよ
うで。なんてつまらないんでしょう。もっと耐えてほしかったのに」

「それ、私をノリノリで犯してる神楽だけには言われたくないんだけど」

「自分の淫乱さを棚にあげないでもらえますか？　あなたがずいぶん乱れてくれたお陰で、もう僕も限界なんですよ」

そういつて神楽は袴を脱ぐと、ぷるんと立派にそそり立った猛りを取り出した。

う、うわ。比較対象がないけど、すごく太くて長くてごつごつしてる。怖い。

「まさか全然慣らしてないのにもう私にそれを突っ込むつもりなの？」

「さすがにそんな事はしませんよ、ご安心を」

じゃあ何をするつもりなのだろうかと内心怯えつつ、思わず神楽に突っ込みをいれてしまう。

「というか、人を淫乱だ何だって言うておいて、神楽も勃起するの早すぎじゃない？」

「全部、あなたのせいですよ。他の女を相手にしている時はこんな事はなかった」

神楽は私の下着を脱がせ、秘部のひだの所に右手をかざすと、私の膣口が丸見えになるように大きく広げた。

「やめて、それ、恥ずかしい……！」

「駄目ですよ。これからがいいところなんですから」

「本当はこういう事はもっと慣れた後の変化球としてやろうかと思っていたんですけどね」と神楽は愉しげに秘部を下から上に撫であげる。

「ひんっ」